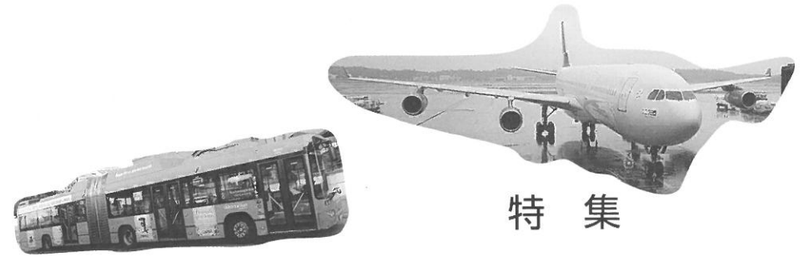

特　集

のりもの大好き！

子どもから大人まで、電車、飛行機、働く車が好き…とのりものが好きな人は多くいます。そして、のりものに乗る・見るのが好き、線路が好き、駅のアナウンスが好き…など、のりもののどこが好きかは千差万別です。今回は、そんなのりものが大好きな人に登場いただき、好きなものに夢中になることの魅力を感じたいと思います。

〈インタビュー〉

私ものりものが大好き！ いつも夢と希望をもつこと

画家　**津田光郎**さん

つだ　みつお／1933年東京都に生まれる。幼いころに伊豆で育つ。「カンカンカンでんしゃがくるよ」（新日本出版社）は16万部を超えるロングセラー。他に「たぐぼーとたぐまるくん」（草土文化）、「きかんしゃパピー」（あかね書房）などの絵本がある。彩虹展主宰。

●きっかけは展覧会で

私は小さいころに伊豆で育ったんです。親父は日本画家だったんですが、早死にしてるから私は親父の顔を知らないんですよ。おふくろは豊かな家庭で育ったせいか、ほんとに働くって言葉も知らないおふくろだった。それで私は小学生の時代からおふくろに絶対怒られたことがなかった。しかも戦争中でしょ。結局、村八分ですよ。何やってもニコニコして怒ることも知らない。でも、とってもつらかったと思いますよ。

だから私は戦争中、小学生中学生のころから庭にさつまいもをつくったり、おふくろはヘチマをつくってその汁をつくって化粧水にしたり。そんなことをやってとっても心だけはきれいな人だった。だからこの心のきれいなおふくろをだいじにしないといけないと思っていましたね。

やっと東京に出てきたのが高校生のときですね。いわゆる商業高校でした。

画家として私がデビューしたのは1964年の東京オリンピックの年です。たまたま児童出版美術家連盟の展覧会に友だちに誘われて、私はのりものが好きだったので南極観測船の「宗谷」を描いたんです。氷のうえに赤い船とペンギンを描いてね。

その絵を静岡にある幼児向けの絵本月刊誌を出版しているところの人が見て、「うちの絵を描いてくれ」と言われました。もうすぐ新幹線が開通しようというときだったので、新幹線ができる話を描けって。ところが資料として出てきたのは新幹線の青写真やトンネ